



野見山 暁治  
(のみやま・きょうじ)

東京都在住の洋画家。安井賞や毎日芸術賞など数々の受賞歴を持ち、2000年には文化功労者に選ばれている。東京芸術大学名誉教授。



林 紀一郎  
(はやし・きいちろう)

静岡県在住の美術評論家。新潟市美術館館長や池田20世紀美術館館長などを歴任。



金澤 毅  
(かなざわ・たけし)

神奈川県在住の美術評論家。元・原美術館副館長。成安造形大学名誉教授。



植松 奎二  
(うえまつ・けいじ)

大阪府在住の彫刻家。日本とドイツを拠点に活動しており、風の芸術展の審査員を今回初めて務めた。

24年目の審査

10回目を迎えた「風の芸術展」。始まってから24年を経ています。経済的な困難により一時、足踏みの破目にも陥りました。数年たって再開されたとき、かつてのような優れた応募者が集まるかと懸念されましたが、どうやら杞憂にすぎなかったようです。

今回の展覧会を見れば、日常私たちが触れている自然、あるいはそれに付随した現象、ともかく共通の具体的な物象が描かれているので、以前の展覧会よりずっと親しみが持てるのではないかと思います。今までは油絵具で描かれていた作品がほとんどでしたが、今回はクレパス、鉛筆、布地、新聞紙といった日常性のもが多い。これもまた、今までより身近に訴えてくるはずです。

聞くところによると、今回の「風の芸術展」は多くの方々の寄附で運営されているとか。それに多くの方々のボランティアによって進行しているとか。私はこの展覧会の存続を、有難く思っております。心に豊かな街が育ってゆくのではないかと。大事に見守りたいと思います。

今回の受賞作品については、ただ描くことの喜び、表現の新鮮さに満ちております。この心を大事にしてゆけば、この度の受賞は生きるでしょう。その期待を込めて、今後を見守りたいと思います。

受賞作・審査所感

「風の芸術展トリエンナーレまくらざき」が、第10回展を開催実現の運びとなったとは、慶賀に堪えない。応募者245名、出品点数347点の中から、平面45点、立体25点の、相変らぬ厳選となった次第だが、入選作全体の質的水準は、過去9回の入選作に比べて遜色はなかった、と言える。

ただ、今回は飛びぬけて目新しさを感じさせる作品に出会えなかった。このことだけが率直に申し述べておこう。とは言うものの、受賞作の10点は、さすがに厳選された入選作の中から更に選ばれただけあって、それぞれ個性的な造形表現に訴求力の強さがあったことも確かである。

今回の特徴として特筆すべきは、平面作品の多くが、既成のキャンパスではなく、各人各様の支持体を作り、絵画の領分をはみでるような造形表現を試みていたこと。これは今回の『風の芸術展』の収穫であったと言えるだろう。

第10回風の芸術展を迎えて

このイベントも今年で第10回を数えることとなった。思い起こせば1989年夏、当時の田代市長の依頼に応じて初めてこの南薩の地にやってきた我々は、これほど長く続くとは誰も思っていなかった。しかし、その後曲折を重ねながらも24年に亘ってこの企画を維持し発展させてきたことは、この小さな市にとってたいへんな負担だったに違いない。その結果として、第10回展を迎える今日、これまでに蒔いた種が見事に花を咲かせている例を各地で見ることができるのである。

2日間に亘って行われた審査会に立ち会って、入選者の質が24年前とは明かに変わってきたことが感じられた。それは地元にも良質の作家が育ちつつあるという実感である。

今回の審査結果を見て、以前に増して鹿児島、九州出身の作家が増加したことに気が付き、24年を経て到達したこの現象を、主催者ともども喜ばしく思っております。2万3千人の小都市が官民一体となって支えてきたアートプロジェクトは、今後他県への巡回展も含めた更なる進展プログラムを立ち上げて将来に向って進んで頂きたいと念じております。

風、風、風が吹いている

「風の芸術展～トリエンナーレまくらざき」のことを聞いたのは15年程前でした。枕崎という地名はカツオで有名で、また台風が本土に一番最初にやって来る所と聞いていました。そんな南端の街で全国的な美術展があることは驚きでした。今回から24年も歴史のあるコンクールに審査員の一人として参加出来ることはすごく光栄なことです。

どの様な作品に出会えるか、わくわく、どきどき、緊張して審査にのぞみました。何度もくり返した審査は本当に丁寧に神経を集中して応募作家の熱心な姿勢に通じるものでした。立体作品は70軒四方の作品ということでしたが、エネルギーの凝縮された作品が前回よりも6点多く79点も応募されていました。ここでも平面作品と同じくよくこれだけ一人一人違った発想と技術と創意の工夫があるものだと思います。一人一人の作家の強く発しているものが伝わって来ました。

今回展示された作品群は、見る人々に新たな感動を与えイメージを増幅させたと思います。これからも作家の皆さんが、新しい発見を試み、新しい意味を持った作品をつくり続けていかれることを願っています。

第10回 風の芸術展～トリエンナーレまくらざき

大賞・準大賞作品



大賞 (平面)  
＜時の波打ちぎわで5-B＞  
吉富ひろみ (東京都)



準大賞 (立体)  
＜大地に旅をする＞  
福元修一 (南九州市)

全国からの応募総数347点  
大賞決定!

7月28日から南浜館と薩摩酒造「明治蔵」で開催している「風の芸術展」。展覧会に先立ち、入賞・入選を決める審査会が7月2、3日の2日間、南浜館で行われました。4名の審査員による審査の結果、吉富ひろみさん(東京都)の平面作品「時の波打ちぎわで5-B」が大賞を受賞しました。第10回目となる

今回は、347点(平面268点、立体79点)の応募があり、平面作品45点、立体作品25点の計70点が入賞・入選しました。美術展としての国内の評価も高い「風の芸術展」。作家たちの想いの詰まった作品をぜひ会場で鑑賞してください。  
■問合せ 南浜館 TEL7219998



審査風景

風まくらざきジュニア展大賞作品

風まくらざきジュニア展の審査会が7月16日、南浜館で行われました。応募総数1405点の中から入賞26点、入選194点が選ばれました。入賞・入選作品はお魚センター特設会場に展示されています。



小学校低学年の部  
＜サッカー＞  
山下健斗 (枕崎小3年)



小学校高学年の部  
＜自然と景色＞  
中村彩笑 (枕崎小6年)



中学生の部  
＜屋の港＞  
川邊葵依 (枕崎中3年)